

『僕たちはチョコレート  
がもらえない。』

☒狐<ヒョウコ>

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

社会からあぶれた男子高校生三人と残念な美少女(?)の物語。

普通の生活を送っていたある一人の男子高校生に訪れる非日常。と、思いきや一部を除き普通の生活をするほのぼの系の学園&日常ファンタジーです。

しかし四人にはそれぞれ辛い過去があり、最初はそのことから目をそらしていたが、あることをきっかけに自分たちの過去を払拭しようと試みる。と言った感じの話になっていきます。

果たして彼、彼女らは自分の過去を払拭し、「普通」の「幸せ」な人生を送れるように

なるのだろうか。

とは言ってみただけ、実際はほぼギャグです。はいw

# 目次

毎年毎年貰えるは罵声だけ | 1

豊島憂美が仲間になりたそうな目でこち

らを (ry) | 13

僕はいらぬモノしか貰えない。

20

今日から僕は自分の時間がもらえない。

I | 29

今日から僕は自分の時間がもらえない。

I I | 35

今日から僕は自分の時間がもらえない。

III | 41

今日から僕は自分の時間がもらえない。

I V | 47

今日から僕は自分の時間がもらえない。

V | 54

僕は胃液が足りない。 I | 67

僕は胃液が足りない I I | 78

## 毎年毎年貰えるは罵声だけ

「ふつ、今年もこの時期が来てしまったか…」

「そうか、もうそんな時期か、時が過ぎるのも早いものだな」

「だが、今年の我らは一味違う…では、策戦決行だ!!俺のカウントに合わせろ?失敗は許されんぞ」

「おい…マジでやんのかよ…やめねえか…?」

「もちろんやるに決まっているだろ。ここにきて怖じ気づいたか?さっきまでの威勢はどこへ行った?」

彼はそう言うのと、カウントダウンを開始した。

「3…」

ドクンッ

「2…」

鼓動が速くなる。

「1…!!」

そして僕は覚悟を決めた。

「「チョコを下さい！お願いします！！」」

ああ、終わった。サヨナラ、僕の輝かしい青春生活（ライフ）…。

朝八時十五分、この学校で登校してくる人が一番多い時間帯。1年生の教室の前の廊下に威勢の良い、そして悲しい声が響き渡った。

声の主は、今、公衆の面前で土下座（若干一名は五体投地だが）をしている三人の男子だ。

周りでは「あいつら可哀想すぎww」「お前チョコあげれば？ww」「嫌だよ恥ずかしいww」など、色々な（主にばかにした）声が上がっている。そんな中チョコを渡す女子が…。

まあ、いるわけもないのは言わなくてもわかるだろう。

\*\*\*

キーンコーンカーンコーン

SHR 終了の鐘が鳴り響く。校内には「気をつけて帰りましょう。そして、また明日も元気に登校しましょう。」などと中学生かよっ！と、ついツツコミをいれたいくなるよう

な放送がかかっている。

生徒達は皆、部活の準備や帰りの支度などを始めていた。

そんな中、部活に出るでも帰るでもなく、ましてや生徒会活動に勤しんでいるわけでもない、基本的に何もしていない男子3人が学校の隅にある教室にいた。もちろん、朝の騒動を起こした奴らだ。

\*\*\*

「おい、お前らチョコももらえたか……？」

僕は恐る恐る聞いてみる。僕がもらえてないのは言うまでもないだろう。

「はっ、なはずww」

まあ、この反応は思っていた通りだ。こいつがチョコをもらえているはずがない。

「俺はもらえたぜ？」

「だろうな、僕らがもらえるはずが……え？今なんて？まさかとは思うが……もらえたって言ったか？」

そう言いつつ僕とそれを聞いた笑哉（シヨウヤ）が驚愕のあまり机を両手で叩きながら立ち上がったのはほぼ同時だった。

そして「へへっ」と言いながらチョコを見せびらかす春人。なにが「へへっ」だ、気色悪い。

が、その後小さな声で「親からだけどな」と半分泣きそうな声で呟いたのを聞き、僕は何も言わずに肩に手を置いた。

「むっ、無言で手を置くなー!!余計に悲しくなるじゃねえか!!」

口調は荒いが怒っているわけではないのはすぐわかる。と言うか本当に涙が浮かんでいるようにすら見える。

「いや、今のはお前が悪いだろ」

「本当それww」

僕ら二人は笑いながらそう言った。

「んで、朝のあれはなんだったのかな?最高の案があるって言ってたから付き合ってたんだが?しっかりと教えてもらおうか、春人君?」

僕はネットで言う「ニコッ?」みたいな感じで殺意のこもった笑みを見せる。

そして、春人と呼ばれた男(本名は足立春人(アダチハルト))。ここではリーダー的存在である。なぜ部長と言わなかったのかと言うと、ここは部活ではないからだ、今は関係ないので置いておこう)は、ひきつった声で答えた。

「い、いやあ、あはははは、ああすれば俺らを哀れんでくれる人の一人や二人がチョコをくれるかt...」

春人が言い終わる前に僕は



「ああ言った後でなんだが…… 言い訳は聞かねえ。そして、最期の言葉も聞かん!!」  
キメ顔（少なくとも僕はそうだと思ってる。というかそうであってほしい）でそう言うのと、「うおおおおりやあああああ!」的な感じで雄叫びを上げながら春人に技をかけた。

「確か、卍固め（オクトパスホールド）だったか?」

小声でそう呟き、見様見真似でかけたこの技が効いているのか気になり、なんとなくに力を強めてみた。

「あああああ!ギブ!ギブギブギブギブ!」

力を入れたのが功を奏したのか、かけられている方は本気で叫んだ。

そして、相当痛いのかお得意の演技なのかは分らないが、抜け出そうと必死に足掻こうとしている。（足掻けているとは一言も 言っていない。）

それを見ている笑哉は笑いながら写真を撮り、その後動画までも撮りはじめた。それにしては笑いすぎだ。笑いすぎて泣いているようにさえ見える。

と、そんなことをしていると突然

ガラッ

何かが開いた音がした。（とは言え、学校の三階にあるこの教室に外から開けられるモノなど一つ、つまりは出入り口となる引き戸しかないのだが。）

(必然的に) 僕ら三人の男どもは扉の方を見た。

「は……？」

そして唾然とした。そこには女が立っていたからだ。それも、俗にいう絶世の美少女ってやつだ。(僕の目がおかしくなければだが。)

なぜ唾然としたかつて？ 学校の教室なんだから女子が来るのなんて普通だつて？ 違う。何故ならここは学校の隅にある、普段は使われていない教室。そのうえ、ヴァレンティンチョコを土下座してでも(僕の場合は不本意だが)もらおうとして、悲しいことにそれでも貰えないような男の集まりなのだから。

そんなことを言つたうえでこちらから質問させてもらおう。もしあなたがこの立場だったらここに来たいと思うか？ 普通の人ならそうは思わないだろう。少なくとも僕が女だったら絶対に思わないだろう。つまりはそういうことだ。(あれ、僕は誰に話しかけているんだ?)

だから僕らはまず、見学に来た中学生が迷子になって教室を間違えたことを疑つた。が、残念(?) な事に彼女も僕らと同じ学校の一年生(同学年)である。それは制服とリボンの色が物語っていた。流石に二月になつてもまだ学校の全体像が覚えられない奴はいないだろう。(この間実に0コンマ1秒!)

そして彼女は

「ここに朝の騒動を起こした三人がいると聞いて来まし。た。？あ、お取り込み中でしたか。また出直して来ます」

と、言つて扉を勢いよくピシヤツと閉めた。

「……は？」

何を言っているんだ、訳が分からない。そもそもお取り込み中はずがない、ここには友達も彼女もないただの暇人しかいないのだから（友達がいないつてのは流石に言い過ぎたわ）。まあつまり、やることがないから僕らはここに居るわけであつて……

「あつ」

ここまで来てやつと思ひ出した。僕が今、春人に技をかけていることを。そしてそれを何かのプレイだと勘違いしたのである。

つてかあの女、なかなかの妄想力だな。それに気が付いた僕も僕だが。

「まっ、待つてくさい！僕たち、そういうのではなくて！」

僕はそう言い、彼女を追いかけようとした瞬間、盛大にずっこけた。春人に技をかけていることをまたしても忘れていたのだ。それを見た笑哉は笑い転げた。

そして僕はそれを睨みつけた。その意図を察したと思われる笑哉は

「へ〜い」

と気だるげな声を出して外へ出た。

いやー、あれだけで分かってくれるから本当にやりやすい。偶に、いや、ほぼいつもウザいが。まあ、嫌いじゃないけどね。

などと思っている

「たっだいまあ〜」

帰ってきた。さっきの女もちゃんと連れてきている。どうやったのかわからんが仕事も早い。まったく、いい奴だ。ウザいが。

\*\*\*

「で、君は誰？何の用だい？」

う、上から視線うぜー!! 客人にこんな態度。もし僕が客だったら絶対殴り飛ばして  
るわ……!!

「えっ、ええ!! 同じクラスなのに覚えててもらえてないんですか!?! ちよつとショックです……」

と、俯きながら悲しそうに言う。

因みに、同じクラスらしいが僕も笑哉も彼女のことを知らない。

さつき来た時は大きな声でハキハキと喋っていたから、元気っ子だと勝手に思ってい

たが、こう見ると意外と大人しめの娘なのかもしれない。

「まあいいです！私はある方と同じ二年B組、豊島憂美（トシマユミ）、ユミって呼ばれてます！足立春人さん世田（セタ）笑哉さん、そして渋谷梓紗（シブヤアズサ）さん！私はちゃんと覚えているんですからね！」

あれ、結構元気っ子？ってかよく僕らみたいな目立たない奴らのこと覚えてたもんだな。

僕がそう感心したのも束の間

「それと、ここに来た理由の前に一つ聞いていいですか？えっと、

あなたたちはどっちから告白して、今はどこまでいったんですか!？」

「あ、二つになっちゃいましたね、えへへ」などと言いながら真面目な顔でそう問うてきた。どこにえへへ要素があったのかわからない。と言うか前言撤回、どこが大人しめだ、まったく逆、そのうえ腐女子じゃねえか！あ、そう言えば入って来た時もそんな事言ってたな、忘れてた……。

笑哉も笑哉だ、なぜそこを訂正してから連れてこなかった。そしてどうしてここに連れてこれたんだ。謎は深まるばかりだ……。

「えっと……僕たちそういうアレな関係じゃありませんからね？つーかこんな真昼間からそんな事する男子高校生がいると思つて？アホの子なのかな？」

「おつと？三人つて何？つてことはボクも含まれてる感じ？」

いや、当たり前だろ！そうツツコミたいがまあ、めんどくさくなりそうだから無視という方向で。

そうそう、僕と笑哉の一人称はイントネーションが違う。僕は下がるが笑哉のは上がる。つてこれ誰に言つてんだ？まいいか。

「あ、アホ!?私にはアホじゃありません！頭は結構良い方なんですから！前なんて十八位ですよ！少なくともあなた達よりは良いでしょ！」

彼女はドヤ顔でそう言った。（頭「は」のところはつつこんだほうがいいのか？）

確かに良い。およそ400人いるこの学年の中で十八位になれる、それは本当に凄いことだ。だが、

「なに、僕たちの順位聞いちゃうんですか？」

「も、勿論ですよ！あんなバカにされたらそう簡単に、はいそうですか、なんて言える訳ないじゃない！どうせあんまり良くないでしょう!?早く言つてみなさいよ！」

あれ、そんなにバカにしたつけ？寧ろ僕らの方がバカにされてね？まあいいや。

笑哉は隣で笑うのを必死に堪えている。彼女の前では春人が「やつちやた」とばかり

に深い溜息をついた。彼女はその意味が分かっているようにキョトンとしている。

まあそれもそのはず、何故なら彼女と僕らは「一度たりとも」関わった事がない（はず）だからだ。加えて、残念なことに僕らは目立たない。つまり彼女は僕らの事を「名前以外何も知らない」のだ。

「はあ……僕たち全員三位だよ。だから君は僕たちよりバカなんだよ」

半分呆れた声でそう言った。（あ、なんでそんなに頭が良いのか、それは聞かないでくれ。悲しくなるから）

と、その時

「——じゃ……い。——ろ」

「えっ？」

彼女は俯きながら何かを呟いた。声が小さくてあまりよく聞き取れなかったが。

「私はバカなんかじゃない！訂正しろ!!」

彼女はそう叫んだ。

「確かにあなたたちより順位が低かった。あなたたちより頭が悪い。それは認めます……。けどっ！それでも私はバカじゃない！私を、バカ呼ばわりするなあ！」

最初は弱弱しい声だったが、最後には絶叫に変わっていた。

そしてその後もそれは続く。

「どんなに頑張つても報われない、その気持ちがお前らにわかるか!? わかつてたまるか！こんな孤独、あじわったことあんのかよ！」

その後も何か言いたそうにしていた。だが、それが口に出される前に彼女は我を取り戻したようだった。

「あ……ごめんなさい、ついカツとなつてしまいました……。今のは気にしないでください。忘れて下さい」

「い、いや、こちらこそすまなかつた。そんなに怒ることだとは思ってなかつたよ」

僕はそう言うのと深々と頭を下げた。

予想外の出来事に僕らは皆、少しの間呆然としている事しか出来なかつた。



## 豊島憂美が仲間になりたそうな目でこちらを（ry

「先ほどは誠に申し訳ありませんでした！」

と、彼女は頭を下げた。

「いいよいいよ、頭上げてよ。別に気にしてないし！それに、君の嫌なこと言ったのは梓なんだし」

「ぶ…」

何も言い返せない。

「だからほら、何も気にしないでいいんだぜ？」

春人が最もなことを言っているのは分る。自分が悪いのも分かっている。だが、なんかもものつそういうぜえ！

叫んでやりたい衝動をどうにかこらえる。春人のあの言い方がどうも気に食わない。

「じゃあこの話は終わり！もう掘り返さない！同級生らしいし敬語も禁止！で、要件はなんだっけ？」

「すっかり忘れてた！ってあれ？言っただけ？」

切り替えはっやいなー。

「う、うん、確か言われてない」

さすがの春人もこの時ばかりは彼女の切り替えの早さに驚いたようだ。

「つーか忘れてたのかよ！ ツツコミを入れたくなるが、ここで入れたら負けな気がするから我慢する。」

「私がここに来たのは、この部に入れてもらいたいからです！」

「「…………… は？」」

\*\*\*

「「…………… は？」」

沈黙が流れる。僕たち三人は、今彼女が言った言葉の意味が一瞬、わからなかった。

「す、すまない、もう一回言ってもらっていいか…………？」

「はい？ いいですけど…………」

春人の問いに対して彼女は首を傾けながらそう言い、その後もう一度さつきと同じことを言った。

「この部に入りたくてここに来た。って言ったんです。」

やはり聞き間違いじゃないようだ。

そして再び流れる沈黙。それを破ったのはまた、立ち上がった春人だった。

「お出口は後ろ側です。手荷物、お忘れ物ございませんようお気を付け下さい。」

そう言うと、春人は何もなかったかのように席に戻った。

お前はなんだ！どっかのウエイトレスか！それともJ Rの駅員さんか！？だがしかし！お前の判断は間違つてない！寧ろ正解だ！G Jはるうと！（伸ばした方が読みやすいからそうさせてもらおう！！）

だが彼女は

「待つて!?!なんでそうなるんですか！私は本気ですよ！」

と、訴えかけるように言つてきた。どうやら、入りたい気持ちは本物のようだ。しかし、こんな集まり、どうして入りたいのか、はつきり言つて僕には到底理解できない。

そこに、今まで笑つていた笑哉が割つて入つて来た。

「いやあ、だつて、ね？ここつてあれだよ？彼女いない歴〓年齢。友達はいるけど喋「れない。女の友達はいない。女の人と喋つた記憶は、三年前に担任から「あなた友達いる？」つて哀れみの目で見られながらきかれて「はっ、はいっ、一応、います」つて涙半分に答えた思い出が一番、記憶に新しい。二次オタ。その他もろもろ、社会からあぶれた「あかん系男子」そんな奴らの集まりだけ？ついでに、ここは部活じゃないからね」

憂美を含む三人は、途中から笑哉を同情の目で見ると出来なくなつていた。つかまだ社会からはあぶれてないからね!?!あと、あかん系男子つてなんやねん！

（因みに、僕の場合は親族を除けば、中三の冬休みが終わつた一週間後ぐらいの日曜日、

受験勉強の息抜きにと一人カラオケ、通称ヒトカラに行った時、偶々クラスメイトに会つてしまい「あつ……」と言われた後「じゃ、じゃあね、シブタニ……君？」とひきつった顔で言われ、訂正せずに「お、おう。じゃあな」と返したのが最後だったと思われる。

この事は誰にも言つてない。未来永劫、誰にも言うことはないだろう。例え嫁ができたとしても。いや、まあできないだろうが。つてことで、この辛い過去は墓場まで持つて逝く!!)

それでもなお彼女は食い下がらずに

「なんだつていいんです！入らせてください！ん？部活じゃないのに入らせてくださいでいいのかな？あ、大丈夫か！」

と言つてくる。

その後いろいろとあり、やむなく彼女を僕らの集まりの一員として入れることになった。

何があつたかはここでは割愛させてもらう（とは言つても、きつとそれが語られることはないだろう）

四人の口論（？）が終わり、気づくと辺りにはすっかり夜の帳（トバリ）が下りてい

た。

家や街灯の明かりはあるが校庭はライトがないためほほ何も見えない。教室の時計を見ると、短針はすでに真下より少し（僕らからして）左を指していた。

こうして僕ら四人は今日のところはとりあえず御開きにして解散していった。

ついでに、僕ら男子四人は当然のことながら、一つのチョコレートももらえなかった。あの会話が二時間近く続けられていたことを、そして最後にはバカみたいな内容になつていた事に僕は帰つてから気が付いた。

「まあ、なんだかんだ久しぶりに面白かった……かもな」

僕はそう呟いた。

（そう言えば、何で憂美があそこまで怒つたのかわかんなかったな……でもまあ、あんまり触れない方がいいのかもしれないし、何も言わず気にしないでおう。よし、忘れよう。全て忘れるのが僕らにとつても憂美にとつてもきつと一番だ。）

僕の中で渦巻いている何かにそう決着を付け、今日あつたことは、朝の騒動も含め全部忘れることにした。

あー、明日からは今まで以上にめんどくさい毎日になるんだろうな。はあ嫌だ……鬱になる……。

「ラブコメ展開になる確率、0%……。はは、笑えねえ」

僕は小さなかすれた声でそう言うと、自嘲気味に笑った。

\*\*\*

その夜、僕は二通のメールが届いた。

一通目は春人から。「来年こそはチョコもらおうな！それと、明日から大変そうだな  
ww」というものだった。

二通目は知らないメアドで、スパムだと思い消そうとしたがメアドの会社名がs○○○○○kだったため、もしかして学校の誰かか？と思い開いてしまった。

内容は簡単というとクソだった。

詳しく言うと「明日から君の家にお世話になりまーす♪よろしくネ？p.s. 今日はずかしく、また楽しませてネ？」といういかにもアホが書きそうなものだった。

「あ、スパムだわ」

そう言って僕は、そのメールをソツコー削除した。

つてか、俺にメールしてくる奴なんてあの二人と身内ぐらいしかいねえじゃねえか！

今更気づくなよ！

そうして僕は、そんな自分に失望しながらベッドに潜り込み目を閉じた。

そーいや今日、ウチにも頭のいいアホが来たつげな。ま、あいつが俺のメアド知ってるわきやあ（訳は）ないけどな。

僕はいらぬモノしか貰えない。

「おつはよお〜！起きろ〜！遅刻すんぞお〜？」そんな誰かの声によつて僕は夢の世界から現実へと意識を戻された。

そうして僕をつまらない、普通の男子高校生としての一日が今日もまた始まる。

……はずだった。

\*\*\*

半ば未覚醒の状態で時計を見た。遅刻はしない程度の時間だ。だが、起こしてもらえなければ確実に遅刻していたであろう。さつき二度寝のためにアラームを止めたからだ。

そして、まだ寝ていたいと反発する身体を無理やり起こした時――

僕は目を見張った。――

そこには、ここにいるはずのない人間、豊島悠美がいたのだった。

眠いという感覚はすでに無くなっていた。今あるのはただ、「なんでお前がここにいらんだ」という不信感と、少しの恐怖だけだった。



僕が只々呆然としていると、彼女は僕が何か言いたそうにしていゝ事に気付いたかのやうに言つてきた。

「ほくう？ その様子から察するに、何故私がここにゐるのか氣になつてゐるやうですなぬ？？ ちがいますかあ？」

確かにそうだ。八割がた合つてゐる。だが、一つ間違つてゐることがある。それは――

「何故ここにゐるかではない、『なんつで俺の家にあるのか』だよつ!!」

――朝から叫んでしまつた。カルシウムが足りないのだろうか。よし、今日の朝食は子持ちししやもと納豆、それに白米にしよう。

「あつてるじやないですかあ？」

「ムウ」と言いながら頬を膨らませている。くそう！ 悔しいが可愛いと思つてしまつたではないか！ これがこいつではなく、二歳ぐらゐ下の後輩だつたら……。

「いや、違ふから。『ここにゐる』だつたら僕の部屋にゐる事がダメであつて家にゐる事自体は認めてゐる事になるだろ。だが僕はそんなことを認めた覚えはないつ！ よつてお前は間違つてゐる！ そんな事もわからないのか、所詮は十八位だな！ とりあえずまず

は国語を学べえい！」

あれ？僕ってこんなキャラだったっけか？なんかこのまま男女男男女女ってなりそうなノリだなあ……そんなことを思い一人苦笑した。

「じゅ、十八位って言うなあ！ってか、十八位って十分いい順位だよね!?それと、あんた今すつごい失礼かつ気持ち悪いこと考えたでしょ！」

ああ、確かに悪いわけではない。

いやー、ね？なんでわざわざ十八位って呼ぶかっていうとね、昨日あんなドヤ顔で言ってきたのがちよつとイラついたからだよ？決して悪意とかはない……よ？別に、三位だからって調子乗ってるわけじゃないからね!?

そう言えば、何で僕たちって頭いいのに社会からあぶれるんだろうな……せめて少しくらいモテてもいいよな……。え？頭がいいのとモテるのは全く別の問題だって？ああ、確かにそうだわ……。

と、まあ、わかっていただけただろうか。ってかわかってくください。ん？誰に説明してんだ？僕。

「なに泣いてんの？キモ……」

「えっ!?僕今泣いてた?ってか酷くね……?」

気付かないうちに自らの言葉で泣いていたようだ。

「だってほんとにキモいんだもん」

「うぐう……」

くっ、変な声が出てしまった。

「ま、まあ、そんなどうでもいい話はおいといて、何でうちにいるんだ……？」

「はあ……」溜息しか出ない。朝からハイテンション過ぎて頭が痛くなってきた。吐き気もする。心なしか熱も出てきたような………。

「いつも以上にグロテスクな顔してるけど大丈夫？」

そう言つて顔を近づけてくる。そんな憂美の突然の行動に僕は驚き、後ろにのけ反つた。そして

ドンツ

そんな鈍い音が鳴つたと同時に頭に鈍痛が迸（ほとばし）る。

「つつう……」

痛みに顔をゆがめながら頭を抱える。

つまりまあ、後ろにあつた（今まで寄りかかっていたわけだが）壁に勢いよく頭をぶつけたわけだ。

「いきなりなにすんだよ……、驚いて壁に勢いよく突つ込んだじやねえか……。くっそいてえ」

「ええ!? え、えつと、ごめん?」

なぜか疑問形で謝ってくる。いや、まあ当たり前か。ただ心配してくれてやった事だもんな、あいつに悪意はないんだ、これで怒るのも非合理ってもんか。

「あ、いや、すまん、今のは僕が悪かつt……いやまて、グロテスクな顔つてなんだよ、心配してるつーよりか、けなしてんだろ。それを言うならグロッキーじゃねえか? つーかこれ、そもそも全部お前のせいじゃね?」

「え? そうなの? 違う意味なの?」

「いや、知らんけど。ってか一番大切なところサラツと無視すんなや」

しかし憂美は「何のことやら」と首をかしげる。いちいち仕草が憎いぐらいに可愛いなおおい!

「あーもう! どうでもいいから、何でお前はこの家にいんだよ……!!」

本日二度目の同じ質問。

ぶつけた痛みはやつと和らいできた。

「え? 言つてなかったつけ!? 私今日からここに住むことにしたから!」

ほう、そんな理由か。そんな理由で僕は朝の貴重な時間を二日連続で邪魔されたのか……。あ? 今なんて言つた? 僕の家に住むだあ? 住む? 住む……。住む……。す

む……。スム……。s u m u ……。

—思考停止—

サラツと言われた言葉に、僕の脳はついていけなかった。「ブツシユウウウ」と音を上げて僕の頭から煙が噴き出した。ような気がした。もちろん実際には出ていない。残念ながら人間にはそんな機能はついていない。

\*\*\*

そうしてどれだけの時間が経っただろうか。五分、十分、いや、もしかしたらそれ以上かもしれない。

僕は少しの間の放心状態からやっと解放された。朦朧（もうろう）とする意識の中時計を見た。だが、その時計が意味していたのは——

「五秒……だと……？」

愕然とした。

そう。実際には体感速度の三十分の一以下しか経っていないかったのだ。

いや、そんな事はどうだって。今一番大事なのは僕が放心した理由である、あの言葉

だ。それについて問いたださなくてはいけない。

「はあああああああああああああああ!」

だがしかし、そんな考えとは裏腹に、次に僕の口から出たものは（と、言うよりただの音に近い）は、驚嘆の声だけだった。

もう、何が何だかわからないよ……。突然僕のうちに住むって、おかしいだろ、おかしいどころじゃないよもう……。そうだ、これは悪夢だ。きつと僕はまだ夢の世界にいるんだ……。！そう考えたら気が楽になって来たぞお？ビバ夢！夢は最高！夢こそ正義だ！僕の夢に幸あれ！

——なんてお花畑思考できつかあほがッ！もう嫌だ……。

「これが夢ならどれだけ嬉しい事か……。」

僕は苦虫を噛み潰したような顔でそう呟いた。

「え？何？なんか言った？」

「言つてません」

「そう？ならいいけど。んんー……。空耳だったのかしら？」

その小さな呟きは幸いと言うべきか、憂美にはしっかりと聞こえていなかったようだ。

もしも夢なら、これ以上に幸せな夢は一生ないだろうな……。現実だとわかつていると、そう考えつちまう生き物なんだよなあ、人間つてモンはよお。

僕は今日、悟りを開いた。今なら空でも飛べそうだ……。勿論これも冗談だぞ？

\*\*\*

その日僕は頭痛と吐き気で学校を休んだ。

飯はししやもがなかったの、食欲もないという事もあり白米と納豆と味噌汁だけの「THE日本人！」なテイストの、質素なものにした。

因みに、憂美もその飯を「少ないし悲しい」などと愚痴をこぼしながらも綺麗に全部食べて出ていった。

愚痴をこぼすなら食うな。別にお前のために作ったわけじゃないんだから！ 偶々多くなつちやつただけなんだからね！ 勘違いしないでよネッ！ そして顔をそむける。

—— などという事もなく、本当にあいつに食わせるために作ったわけではない。断じて違う。ツンデレは好きだがツンデレにはならないぞ？

「はあ。もう体力がもたない。とりあえず寝よう」

キャリアバッグ置いてつたところを見ると、学校が終わったら帰ってくるのである

う……。まったく、先が思いやられるよ。

こうして僕の輝かしい青春生活は静かに幕を閉じたのであった。いや、まだわからないか。んじや、終りを告げるであろう。

そして僕はベッドに潜り込み、本日二度目の涙を流したのであった。その涙がラノベ展開のよる歓喜からなのか、それとも不安と憎悪から流れたものなのか。決して前者ではないと思う。そうでなくてはならないのだ。



今日から僕は自分の時間がもらえない。 I

「たつだいまあ〜！」

勢いよく開け放たれた玄関の扉の音が、寝ていた僕を無理やり起こした。

ついでに、無駄にでかい声でイラつく。猛烈に。わかるだろ？無理やり起こされて、そのうえギャーギャー喚かれるこの憎悪。俺の怒りが有頂天になるのは当たり前前だろ？

え？ネタが古いつて？うっせえ黙つてろ！

つてことで、

ダッ

「うるっせえよ！とつとと黙つて出ていけえええええええええ!!このっ、おんぼろ雑巾風情がああ！」

ダッ

「僕はてめえがうちに『いる事』すら、認めてねえんだよおおおお!!」

ッダッ

「でゆらあ〜！」叫び声を上げ、階段の上からジャンプして、そうして腰にドロップキック

をかました。

我ながら惚れ惚れするほど綺麗に決まったぜ（ドヤ顔）

「ぐへっ」

女としては残念すぎる声（と言うか奇声に近いなw）を上げて横にブツ飛んだ。

「はあ、はあ、オエツ」かました方もかました方で、ドヤ顔の後に息を切らしながらえづく。叫んで暴れたせいも、また気持ち悪くなってきた……。

「そんな事言わないでよ！ま、何と言われようとここに住むけどね！」

何もなかったかのように、壁にめり込んだ体を起こした。不死身なのかこいつは…… めり込んだ!?

そして僕はまた二階に上がっていく。

「ちよ！私を置いて上行くなよ！リビングでくつろぐぞ!?!それより、痛いじゃないか！なんて事をするんだ、君は！」

「好きにしろ」とだけ言って部屋の扉を閉めた。

ってか、こいつマジで何なの？僕を殺したいの？胃に穴あきそうだよ？あつ、蹴りの方は完璧何もなかった方向でっ。

「ツーか何で？お前、親は？住んでる家は？僕の事情以前の問題だろ？」

そう、自分以前にこいつの問題だ。

「いや、そんなのいいから。今私の親二人とも日本いないし」

その言葉には棘があった。でも、それでも、その声の奥には少し、寂しさのようなモノがあつたように思えた。

「つてことで」

……  
え？

「よろしく！問題ナツシングなのよさ！梓だつて一人暮らしでしょ？寂しいよね？友達だつていいし？」

さっきのは勘違いだったのか……？まあ、それならいいんだが……。んん？今ものすごく失礼なことを言われた気が!?

「っおい！とつ、友達はいるからなっ!？」

「いないつて聞いたんだけど……？？」

なっ！やめろ！そんな、ゴミを見る様な目で見るのはやめてくれ！いや、実際見えな  
いから何とも言えないのだけれど！わかるよ!？それでもなんとなくだけどわかるから  
ね!?

「い、いないのは女友達だけであつて……、友達がいない訳じゃないから……。それよ  
り、誰からそんなこと聞いたし」

「へー、そーなんだー。どーでもいいけど」

なんだよその態度、まるで僕が悪いみたいじゃないか……。

「おい、僕はお前の間違いを正してやっただけなのに、それは酷くないか……？それと、僕の質問は無視なのね」

「そー言えば、春人君と笑哉君、心配してたよ」

「またもやしカト!？」

「いや、それこそどうでもいいわ。あんな奴ら」

「え、同じ部活だよね!?!幼馴染なんだよね!?!嬉しくないの!?!」

何で幼馴染なの知ってるんだ……？あいつら、この一日でいったいどこまで話したんだ？まさかあの事は……。

「いや、全然。同性から心配されても……ねえ？嫌じゃないけど、でも別に喜ぶ様な事でもねえだろ？それと、部活じゃないから」

「ああ、それもそうだね、男の子同士だもんね！あ、そう言えば確かに部活じゃないって言ってた！」

あ、いや、話してないね。（\*因みに、部活の下りはこいつが空き教室に来た時参照）

「あれ？でも、三人ってホム（モ）」「だから違うって言ってるだろ!?!タヒね!！」

あつ、ついネット用語を使っちゃった。ま、言いなおさなくていよn（な）

「それは酷いよ!?!最後のは流石にへこむ!！」

…おい。わかんのかよ。まあ、こいつもそつち系だもん！ならいいや。

「知るか。おめえが悪りい！」

優実は「うう、酷い、泣いちゃう」などと言っているが顔は明らか笑っている。のだらう。

「とりあえず下りてきなよ、二階に聞こえるように喋るの疲れる」

「なら喋んな！そして早く帰れ！」

「何言ってるの？今日からここが私の家だと言っててるじゃない！だから帰ってるよ？」

ちっ。こいつは。

「はあ？言い方が悪かったか？ああ？ならこう言ってやろう。もともと住んでた家へ帰れ！」

「いやーだね！」

即答！

はあ。もう嫌だ…。疲れた…。

「い・い・か・ら・

帰れええええええええええ！」

本日三度目の怒声。二度あることは三度あるってな。はは、笑えねえ…。それでも

あいつは、帰る気にならないだろうけど。

今日から僕は自分の時間がもらえない。 I I

「……はあ」

その後もたわいのない……わけではが、とりあえず傍からすればバカみたいな会話を続けることになった。

「なにが悲しくてこんな乙（残念系）B（美少女）（仮）と一緒にいにならんのだ……」  
そう呟くと美優は「何か言った？」と睨んできた。ような気がする。ちよつと悪寒がした。何で二階から一階に僕の呟きが聞こえるんだ……。地獄耳かよ。

ピンポン。ピ、ピ、ピンポン。

そんな時インターホンが鳴った。

おお、これはなんだ。神の助けか！こんなバカみたいな会話をやめる口実とするための、神がくれた助け舟なのか！そう思い玄関に出ようとした。が、同じタイミングで美優も出ようとする。

「おっ、おい！ばっ……」

ドアを開けようとする憂美を止めようと、階段から玄関にいる憂美めがけダイヴ

！…… した時にはもう遅かった。

「ふびやっ！」

憂美をつかもうとした腕は空をかき、支えるモノが無くなった身体は勿論、ニユートンが見つけた法則に反することく地に落ちた。

ガチャ

憂美によつてドアが開けられた。そこに立っていたのは……。

「よう…… え？」

「あっ……」

自分の中で空気が凍り付く。

まずい、まず過ぎる。これは非常にまずい事態だ。

「お前ら…… そういう関係だったのか……？ すまん、邪魔したな、では、さらば！ お幸せに！」

「ぶはっww」

そう言つて走り去っていく。

やっべ、めつちやデジャブった……。じゃねえ！

僕は全力で追いかけた。見舞いに來たと思われる春人と笑哉を。

「あーもー！ なんなんだよー！」 心の中で叫びながら僕は走り続けた。



\*\*\*

「ああ、そういうことなのか！ つい勘違いしちゃったじゃないか。まあ、知ってたけど」

その後、結局二分もしないうちに捕まえ二人をリビングに連れ、事情を話した。

おい、軽いな。つーか女子と二人きりで二つ屋根の下暮らすのがやばい気がするの僕だけなのか？ って……、

「はあ!? 知ってたなあ!? 知ってたってなんだよ！ じゃあ、あの反応は!?!」

「ちよつとからかいたかっただけ」

「ぞっけんなあ!? 俺、一応病人だぞ!?!」

つい、一人称が俺になっちゃった。興奮すると偶に昔の癖で……。 なっちゃまうんだよな。

「で、何で住むこと認めたんだ?」

こいつらがこんなにもあつさりとその状況を受け入れたのはまあ、憂美がこんな奴だつて知ってるからなんだろうな。

「僕は一切認めてねえよ！ むしろ納得してねえでこいつを家に帰すの手伝ってほしいぐらいだわ……。僕はこんな奴と住みたくないぞ？ 今日だって誰のせいで学校休んだと……。」

「あー、そうだよね、やっぱりそうだよな。もっと普通の美少女が来て欲しかったよね。でも、こつちの方がラノベ主人公みたいじゃないか？それに、こればかりは俺にはどうもできねえわ」

真顔で言ってくる。笑哉もうんうんと頷く。うん。わかった。そう言われるのはわかった。僕が逆の立場でも多分、全く同じ事を言っただろう。

そう思いながら僕は自嘲気味に笑った。

「ねーねー、さつきから酷くない!? 私にとてつもなく失礼だと思わない!」

「でも事実じゃん」

わお、バツサリと言うね。確かにその通りだと思っから僕は何も言わないけど。

「私ってそこまで酷いです…?」

「うん、きつと君が思っている10倍以上酷いと思うよ?」

「そんなに!」

あ、やっぱり少しは酷いって自覚あつたんだ。

「あ、少しは自覚あつたんだ? w w」

おい笑哉!なぜ口にした!?!そして笑いすぎだ!

今更だけど、春人がここまでハッキリ他人をけなすのつて初めて見た気がするな…: 小学校でも中学校でももう少しオブラートに包んだのに…:。まあ、ズバズバ言うの

は変わってないけど。

「おい春人、今日学校で何かあったのか？ここまで酷く言うの、お前にしては珍しくないか？」

「いやー、何も無かったよ……」

「あ、それ気にしなくていいよww美優だけが梓の欠席理由知っててちよつと嫉妬してるだけだからw本つ当子供だよねーwwwwww」

「おいっ！バカ！それ言うなって！」

机を叩きながら叫ぶ春人。その顔は怒りからか屈辱からか真っ赤に染まっていた。やめろよ！これじゃあまるで僕たちがホム……

「それじゃあまるでホムですね？」

「ヴーっ！」

無邪気な顔でそう言った憂美に、僕は口を付けた茶を盛大に嘔き出した。

ってかなんだよこいつら。エスパーか、エスパーなのか。

「ちよつ！汚いなあ……」

茶を流すため台所へと歩く。

「で、話し戻すけど、」

席を立った憂美を気にすることなく話し出す。さっきまでの赤面は何処へやら、まる

で何も無かったかの様に。

「こいつの事泊めて良いのか？」

わかりきった事を言うな。良い訳ないだろ？と答えようとした、が

「いいよ〜」

「「お前に聞いてねえ!!!」」

テヘツ。憂美は右目を閉じて舌を出した。あーくそっ！何でこういう時だけ可愛いんだか！

不覚にもそう思ってしまう自分が一番許せなかったのは、言うまでもない。

## 今日から僕は自分の時間がもらえない。Ⅲ

チラツ。軽く時計に目をやる。

時刻は午後11時を回ろうとしていた。

「住ませない」「住む」「こんな時間だから早く帰った方がいいぞ」「今家にいるじゃない」「いや、てめえのだよ」などとほぼ同じ意味の会話を72週ほど繰り返し返したところだが、このままでは埒（ラチ）が明かない呆れた僕は、流石に時間も時間と言う事で今日だけは泊まることを許した。決して諦めた訳でも認められた訳でもないからな!?!あくまでも泊まるのをだからな!?

\*\*\*

その夜、思春期の男と女が一つ屋根の下と言うのは色々とまずいという事を口実に、春人と笑哉も「泊まって」いくことになった。

こんなアホ相手に欲情するかボケ。と言うのは言わないでおこう。

「あー、こんな近くに女との関係が微塵もなかったクソ男子が3人もいるってのに、よくもまあ悠長に風呂なんか入れるもんだよな」

「そんなこと……言うって事は、覗きに行くって事かなあ？」

春人はそう言って「カカツ」と笑う。

「あんな奴の見たって嬉しくないわい」

とは言うものの、ちよつと見てみたい気もしなくない。ちよつと、本当にちよつとだけだから！

「俺、行つてこようかな……風呂入ってるの忘れてたつて言えばいける気がする……!! あいつバカだし?」

「やめとけつて。つっつかやめてくれ。そんな事したら僕らが風評被害に遭うんだから! いけると言うか逝つちやうから! いやマジで!」

ああ、僕ら全員がぼこぼこにされた後天井に吊るされている姿が目には浮かぶ……。

「それでも……俺はやらなきやいけないんだ! だつて! 今を逃したら、今一生こんなチャンス訪れねえ! 絶対!」

一度大きく息を吸う。

「死ぬつてわかつていても、男には、やらなきやいけない時がある!」

背にしたドアから漏れる光が後光のように射す。おいおい、カツコいい様な悪いような……。

「じゃあ、行つてくる。俺の最期、汚く咲いた花だけど、散り際、しかと見届けてくれ?」

「いってら。その代わり、僕らは外言ってるから。行くぞ笑哉」

そう言つて立ち上がった僕の後ろ付き、逃げるように『窓から』出て行つた。

それを見た春人は「え？」と、状況が全く読み込めていないようで目を開き首をかしながら、因みに、ここは一階だから窓から出ても全く問題ない。と言うか窓の外は中庭だし。

「ちよつ、お前等何を… あつ」

春人が僕らの行動の意味に気付いたのは僕らが出て行つた約0.5秒後。

その0.5秒は短いようで、彼の死を宣告するには十分すぎると言つても過言ではない時間だった。

\*\*\*

「ギヤアアアアアアア!!」

家の外で聞く彼の断末魔はあまりにも虚しく、これまでに聞いたことのないほどに悲惨なものだった。

「くつ、今思うといい奴だったな…。お前の事はきつと（3秒ぐらい）忘れない…。！」

目を閉じ歯を食いしばる。

「人の夢と書いて儚い。お前のその夢は果たして、命をかける意味があるものだったの

か……？惨めに散ったお前の命、きつと無駄にはしない……今までありがとう……ぶふっ！」

おい笑哉……そこは笑つてはダメだろう……いや、僕ももう耐えられなかったけどww

ガラッ

笑つていると、さつき僕が開けた窓とは逆の窓が開いた。そこからは目を不気味に光らせた憂美が出てくる。

「人の夢と書いて儚い……あいつの夢も儚く散らしてやりましたよ。で、君たちも変な夢を抱いていると……？」

と言うと彼女は無言で意味ありげに微笑んだ。うわ、怖え。つてか、ついさつき聞いたのと同じようなこと言われたなあ……あと春人、後でマジ殺す。

「な、なあ、ちよつと落ち着こう、な？」

手を前にし、殺気を放つあいつを制止……

「問答無用！」

できませんでしたあゝ。

シユビツ！

空気の揺れる音とともに憂美の姿が眼前から消える。



「どこ行つた!？」

「遅い……!」

「げふっ」

目が追い付かなかった。いつの間にか後ろに回り込んでいた憂美の拳が頸椎を揺らす。おい、これつてあくまで普通の世界だよな? 異世界バトルじゃないはずだよな……?

「梓ア!」

「次は君だよ」

笑哉の声が聞こえた気がしたが返事をするにはできなかつた。すまない、僕はもうここまでのようだ。後は任せた……。

\*\*\*

「ま、待てよ! ボクらが何したつてんだ!」

「何を、だと? 戯言をつ! 回り込んで私の入浴シーンを見る手はずだつたんだろう!」

何でこいつの攻撃こんなにキレッキレなんだ?

「ちよつと待てつて! お前と目が合つてからボクら出つただろ!」

そう言うのと、一瞬だが攻撃の手がやんだ。

「……た、確かに」

「ほ、ほら、だからそこで伸びてる梓も連れて帰ろう……ぜ……え？」

油断した。まさかこれでもまだ攻撃してくるとは思わなかった……。

に、鳩尾を拳で穿たれる。そして目の前が闇に染まった。

一瞬の隙の間

## 今日から僕は自分の時間がもらえない。I V

目を開けるとそこは、ここ3年間で一番よく目にした光景が広がっている空間だった。

いったい何があつてこんな所で寝ていたのか、思い出そうとするとそれを脳が拒絶するかのように頭が痛くなる。

「やつと起きたの？じゃあ、私は先寝るから」

突如声のした方向へと顔を向けると、そこにはとてもすがすがしい笑顔をした憂美が部屋を出ていく姿があつた。とてもこれから寝る奴の浮かべる表情ではないと思うのだが……。

「お、おう。何でそんな笑顔なんだ？とりあえずお休……み？」

ん？頬に何かついて……血？

動き出した憂美の風になびく髪の間隙から肉付きの良い整った形の頬が見えた。しかしそこには普段の血色のいい皮膚ではなく、文字通りの『血』が付いていた。

「なあ、その頬どうしたんだ……」

そこまで言つて言葉が詰まる。

なんだこの、のどに絡むモヤモヤとした感覚は。何か忘れている。大切な、何かを……。

『人の夢と書いて儂い』

「あつ」

そうか。そうだ。そうだった。僕らはさつき、春人のせいで殺されかけたんだ。他でもない、憂美に！

「おい、ちよつと待て」

思い出したからにはただじゃ済まさない……て、あれ？ 憂美は？

さつきまで憂美が居た所はもぬけの殻、もうそこに憂美の姿は見えなかった。

「クソ…… まあいいか、明日やれば」

日付的にはもう今日だけど。と一言付け加えると脚を洗った後、敷かれていた布団に潜り込んだ。

二人ももう寝たのか。早いな。

うちに慣れていない二人のためにと点けている豆電を見ていると眠気はすぐにやって来たのだった。

\*\*\*

ガサゴソ。ガサゴソ。

「んんん」

バサツ。

「なんだこの音…。」

僕は異様な音に目を覚ました。まさか、泥棒か？でもうちに盗むものなんて…あ、有るか無いかは泥棒は知らないから仕方ないな。

「さあ、行くか」

ん？

どこかで聞いたことのある声な気がした。

いやいやまさか…。

恐る恐る目を開ける。

「Let, s夜這い！」

なんだ、ただのバカの音だったようだ。理不尽な同罪にはなりたくないから寝たふりしとい。

「梓、起きてるんだろ？行くこうぜ？」

気付かれていたのか。それともわざと起こされたのか。

「なあ」

「行くか？行くんだな？」

「いや、ちげえよ」

「じゃあ何、トイレが怖くて付いて来て欲しいって?」

「なぜそうなる」

あー、でも確かに怖いかも。主にあの暴君（憂美）と、それにあんな事されておいて平然としているお前のその神経が。

そう言や、こいつ死んでないからさっきのは断末魔じゃなくてタダの絶叫か。うん。どうでもいいや。

「そういうのいらんから。普通に寝てくれって言いてえんだよ。それと、ここ僕の家。家主が怖がるか? 普通」

「ああ、それもそうだな」

納得したかのようにうんうんと頷く。バカの子かこいつ。

「そんな事より、何で僕がここで寝なきゃいけないの? さっきも言ったけど、僕この家主。部屋あるの」

「それは俺に言うなよ。あいつに言ってくれ」

「そうだけどさあ……」

でもだって、寒いじゃん! ここすげえ寒いんだぞ!? 自分の部屋あるのに何でこんな寒い思いしなきゃいけないの!? 風邪ひくは!

「なに？ 私にそんな汚染物質（春人とお前）の居る部屋で寝ろというの？」

「僕が汚染物質なら、君は汚染地区で寝ている事になるんだぞ？ つてうお!!? いつからそんな!!?」

気付かなかつた。いつからいたんだ。マジで。

「ちようど、『憂美可愛すぎハアハア』辺りからかしらね」

「んなこと一言も言つてねえよ」

なに当たり前のように嘘ついてんだ……。

「あ、汚染物資つて俺等の事か!」

今更かよ遅せえよ。と、ツツコみたかつたがツツコんだら負けな気がしてツツコむのはやめた。

てか俺等て。僕も入れんな。お前には入れられたくないわ。

「あれ、今俺らつて、俺等つて言つたよこの人。ボクの事も入れてるよねこれ絶対」  
そしてまたいつも通りケラケラと笑う。

つて、お前起きてたのかよ!?! 静かだから気付かなかつたよ! お前からマジなんなんだ、超能力で気配も消せるのか!

「どうでもいいけどお前に入れられたくないって卑猥だよな」

「突然何!?!」

「いや、なんとなく思った」

「わけわかんない……」

「大丈夫。僕もだから」

眠気で頭がおかしくなってるよ。寝なきや。

「じゃあ、寝るわ」

「あ、うん。じゃあ、おやすみ。汚物さんたち」

「あー、やっぱり僕も入れられてたかー」

この扱いは慣れてるけど、慣れてるけども！それでも虚しいわ。

「うわっ、それは酷いw、棒読み過ぎるなww感情入ってなさ過ぎww」

その言葉で僕は目を閉じ、憂美は部屋に帰っていった。僕の部屋に。

あーこいつは本当ブレないなあ。そんな音を思いながら僕は憂美が階段を昇っていく音を聞いていた。

「……あれ？春人は」

衣擦れの音がしないことを不審に思い再び目を開ける。すると、そこにいたはずの春人の姿がなくなっていた。話に夢中で全く気付かんかった。それはきつと憂美も同じだろう。

まあ、大体予想はできるけど。



そうしてその後、案の定憂美と春人の叫び声が聞こえるのは、また少し後の話である。

## 今日から僕は自分の時間がもらえない。 V

憂美が階段を上る音が止み、僕の部屋のドアを開ける音、そして鍵を閉める音が聞こえた。その瞬間、

「おい、夜這いに行くぞ」

隣でそんなささやき声が聞こえた。そんな気がしたがきつと空耳だ。うん。

「おい、夜這い行くぞ」

一分程しただろうか、また同じ言葉が聞こえた気がする。

その声のした逆側には、気持ちよさそうに寝息を立てている笑哉がいる。

「寝れないな。耳鳴りがひどいな。でも起こさない方がいいよな。じつとしてよー」

独り言のように小声で呟いた。ちよー、棒読みで。

「いいからさっさと夜這いに行くぞ!」

そしてまた一分ほどたったであろうその時、また聞こえた。

今度のそれは、確かな、鮮明な声となつて僕の耳に届いた。

それと同時に、（正確には数秒後だが）リビングのドアが開く音がした。

あれ？　そういやこいつ、今どこ行つてたの？　てつきり憂美の（正確には僕のだが！）部屋に行つたとばかり。

「……」

それに気づいた僕は起きていることを悟られないよう、只々息をひそめ静かにしている事しか出来なかつた。

寝返りをうつふりをして隣を見ると、そこには青ざめた顔をした春人と、それを見つめる安定の笑顔をした憂美の姿が見てとれた。

先に言葉を発したのは当然憂美で、

「何の話をしていたのかな？　楽しいお話？　お姉さんにも聞かせて欲しいなあ〜」

数秒の時間が流れる。

お姉さんって誰だよ。お前、僕らよりまだ1つ下やろ……。

「おい、何の話してたんだって聞いてんだよ」

ひい!?　何こいつ怖!

その声音からして、少し怒っているようだった。と言うか、もうこれ、威嚇だよ。

「ひい!?!」

そんな情けない声が聞こえたが、そんなのお構いなしに憂美は言葉を続けた。春人の奴はきつとすごい顔してるんだろ。見れないのが残念だよ。

「もう一度だけ聞くね？これが最後だから」

あー、アニメとかでよくある常套句だー。こんな言葉リアルで使う人初めて見たなー。

そう思いながら寝たふりを続ける。

「今なんて言ってたの？いや、さっきから何の話していたのかな？」

あー、何だ。最初から聞いてたんだー。てあれ？こいつさっきから話してるって言葉を……もしかして、僕も共犯にされてる？

「まあ、梓君はほぼぼつと寝たふりかましてたし、それだけでも偉いからお咎めは無しでいいや。でも……春人君？君には少し、お仕置が必要かな」

語尾にハートが付きそうな言い方だ。しかしそれが余計に恐怖をそそる。

てか、やっぱ僕も入ってたんだね。ま、僕が理不尽な仕打ちを受けなくて済むなら何でもいいや。

「おし……おき……!!」

こいつもこいつでアホだ。前から分かったた事だが、やっぱリアホすぎる。

「そう、お・し・お・き？」

そう言い残し、憂美は春人を連れて二階へ戻って行った。

「これで寝られる……」

春人のことなど一切、1ミクロも、金輪際、考える事無く寝ることにした。

「御愁傷様」

!?

お前起きてたの？だがいつものように笑ってはいない。耐えているのか？それともタイムリーな寝言か？

まあ、そこまで気にする事じゃ無いから今は寝よう。

そうして午前2時過ぎ、僕の最悪な一日は幕を閉じたのであった。

\*\*\*

「はっ！」

僕は夢が夢であることに気が付いた。つまりまあ、目が覚めたつてことだ。

なんとなく、いや、ものすごく重い気がする。昨日あれだけ騒いだ（騒がされた）からまだ疲れが抜けきってないのだろうか。だが、そんな重さじゃない。これはまるで重力が倍になったかのようなようだった。

眠い目をこすり、やっとの思いで目を開ける。そして僕は驚くべき光景を目の当たりにした。

「うわあ!?!な、な、なんでお前が!?!」

あまりの衝撃に素っ頓狂な声が出てしまった。

(はっずかし…)

僕は変な声を出してしまった恥ずかしさに身をもだえているがそんなこともつゆ知らず、僕の口元を抑え

「しっ、喋らないで。二人が起きちゃうでしょ」

などと小さな声で言ってくる。因みに、僕の口元を抑えていない方の手は、人差し指が自分の唇当てられていて、整った綺麗な顔にどこかあどけなさを感じさせる。つてか何で僕が怒られてんだ…？

そう、横たわっている僕の上にはなんと、憂美が跨(またが)るようにして座っていたのであった。それだけではない、彼女が身に着けているものは薄くて大きい、白い布一枚だけだった。

「さて、さてさて！何でこんなことになってんだ!？」

そう叫ぶやいなや僕は、今までに出したことの無いような力を脚に込め、ベッドの上に立ち上がった。

「い、痛いわねえ！何よ!」

僕が立ち上がったことにより転げ落ちた彼女がそう言ってくる。まあ、当たり前か。「何してんのか聞きてえのはこっちだわドアホ!」

「… 変態… 疎チン…」

「…は？」

一瞬、なぜ突然そんなことを言われたのかわからなかった。だがその後すぐに気付く。もう一つの見落としていた問題に。そう、それは…

「なぜ僕まで…裸…？」

バツ。取り敢えず大事なところを両手で隠す。

「さつきからあなた何言ってるのよ、まさか… 忘れたの…？ 私に、あんな事しておいて…」

「…えっ？」

まで、俺はこいつに何かしたのか？ そんなはずはない。何故なら、春人が連行された後、僕はすぐに寝たからだ。うん、寝たはずだ… よな？

焦りと不安からか、一筋の気持ち悪い汗が首筋を伝う。

「本当に忘れたの？ 私が寝ている部屋に突然入ってきて、逃げようとした私を無理やり押さえつけて、そのまま…」

「う…：…：うそだあああああ！ 嘘だどんどんどー…！」

\*\*\*

「どんどんどー…！」

叫びながらと起きた先は常世…：ではなく、普通のウツシヨ、現実の世界だった。そ

う、つまりさっきのは夢だったのだ。

「はあ、はあ・夢……だったのか……？」

最悪の目覚めだ。本当に最悪だ。

「はあ」

リビングに敷かれた布団の上でため息をつく。

と、その時、

「あ、起きました？」

「ギヤアアアアアア!？」

うわ、ビックリした……思わず本気で叫んでしまった。

「なに!? 開口一番失礼過ぎません!？」

変な夢に出てきた奴がすぐそこにいたらそりゃ、ビビるわ……。はい、自分の勝手な

ものですすみません。

あと、開口一番ではないかなあ。

「す、すまん」

でも、勝手にウチに住もうとしてる奴に、失礼とか言われたくないなあ。

「あれ?二人は?」

「ん? ああ、笑哉君は帰ったわよ」



マジか。早えな。

「んじや、もう一人の方は？」

「アホはほっときなさい。じき起きるわ」

案の定、どこぞでのたばつているようだ。いやー、流石バカって感じ？

「思ったんだけど、お前喋り方変わったか？」

「え？えつと、これが普通の喋り方なのよ。昔から劇とかよく見てたから、自然とこんな感じになっちゃったのよね」

「そ、そうなのか。何か……どんまい？」

「なぜそうなる!？」

食事を作る手を止めツツコまれた。

こいつ料理できるんだ？

「いや、だって、さ？お嬢様口調（？）のアホキャラって……ね？と思ったけど、それもそれでありか」

「そういうもの？って、誰がアホキャラだ、誰が！私はむしろ頭がいい方だって何回言ったらわかるんだ!?!このバカ！」

あれ？喋り方戻った？

「んーあと573回ぐらいかな？」

「んなっ！473!？」

驚いた顔をしたと思つたら「私はアホじゃない私はアホじゃない」と呟きだした。100回減らすなよ。

「あ、大丈夫みたいだ。戻つたよ。さっきのは気にしないでくれ」

「アホじゃな……はい？気にするわ！つて、あ。忘れて……いや、忘れてたとかじゃないよ！ちよつと焦つただけよ！おほほほほ」

今この娘忘れてたつてガッツリ言つたよ。

「おい。キャラづくりだったのかよ」

ちつ、ばれたか。みたいな顔しやがつて……。こいつ、バカなのか？あ、バカだったわ。忘れてた。テヘツ。

「うわあああああああ!？」

突然、叫び声が聞こえた。どうやら春人が起きたようだ。はあ、面倒なのがまた増えた。

「嫌そうな顔してるけど、あなたも同じような叫び声で起きたわよ?」

「嫌そうなんじゃなくてその通りなんd……今なんて?」

「同じような叫び声で起きたつて言つたのですわ」

「マジか」

「おおマジですわ」

「僕あんな起き方したの!?!はっず!・チョー恥ずい!」

最悪だなおい!あ、あとそのキャラもういいんで。

「そうよ?あんな間抜けで阿保みたいな声を出しながら起きたのよ?いやあ、あなたも春人君もさぞ滑稽な夢を見ていたのでしょうね」

語彙力無さ過ぎだろこいつ。。。いつまでそのキャラ続けんの?僕もあいつもお前のせいでこんな事になったんだぞ?多分。と、言いたい事は沢山有るが今は言わないでおこう。

「何で!何で俺裸なんだよう!?!」

はっ!?

ダンダンと大きな足音を立てながら階段を下り、僕と憂美の居るリビングへと入って来た。先ほど言った通りの『全裸』で。

「あ…… あんたねえ……」

憂美は顔を真っ赤にして下を向きながらうち震えている。歯、食いしばりなさい。小さな声で呟いた次の瞬間、

バツチーン!

強烈な音が鳴り響いた。」

言わずもがな、憂美が春人の頬めがけ平手打ちしたのだった。

平手打ちを食らった春人は、まるで陸に打ち上げられた魚のように身を悶えさせている。哀れだ。

「この、ど変態があああああ！」

春人の腹には赤く綺麗な椀の形が付いていた。

「頬をめがけて腹に当たるのは、ある意味才能だね」

僕のその言葉に憂美は目をそらしはにかんだのであった。

\*\*\*

「なんで俺、裸だったの?」

立ちなおってから最初に言った言葉はこれだった。まあ、起きたら裸だったとか、そりゃ、そう言うわな。

「なんででしょうねー」

「なあ、それは僕も気になるんだけど。まさかだけどセイコーとかは…。」

まさかとは思うが、ウチでそんな事があつたとしたら、僕責任とれないし…。

「何言ってるの? バカなの? 死ぬの? 私がこんな奴とんな事するわけないだろ」

で、ですよねー。

「じゃあ何で?」

「知らないわよ。真面目に」

「えっ」

「どういうことだ。昨日の夜の出来事を二人とも知らないだと？だが、これに関しては憂美が嘘をついているようにには見えない。」

「あの後何があつたんだ？僕はすぐ寝たからわかんないんだ」

「何かがあつたのは僕が寝た後、つまり春人が連れていかれてからのはずだ。」

「えっとねえ、あれからは春人君の事部屋でボコつてから外に出してすぐ寝たわ。で、起きて廊下に出たら全裸で俯せになつてる春人君がいたから見て見ぬふりしておいてきたの」

「あっ」

「ここで春人が何かを思い出したように声を出した。」

「そうだ、あの後朦朧とする意識の中もう一度夜這いに行こうとしたんだ」

「ほんつと懲りねえのな！ドMか！ドMなのか！」

「で、脱いで部屋に飛び込もうとした時ドアが閉まって、それに激突した俺はそこで気を失ったんだ」

「……………」

そして流れる沈黙。それはやけに重かった。

「悪いの全部でめえじゃねえかあああああああああああああああ！」

こう叫びながら春人を思いつきし殴つてやった。

この時の僕と憂美のシンクロー率は、地震が起きた時のツイッターに似たものがあった。

因みに、ツイッターとは、ツイッターと言うSNSに廃人ほどではないにしろ入り浸っている人の事である。地震が起きた時は約二秒でTL（タイムライン）が地震に関するもので埋まるという。

「げ、ふっ」

そんな悲しい声とともに春人は崩れ落ちた。

その後春人は全身が痛いからと言い家に帰っていった。

こうして僕達の貴重な休日半分の半分と、最悪なお泊り会は終わり告げたのであった。勿論、憂美は一向にうちから出ていく気配のないままだった。

# 僕は胃液が足りない。 I

「オエエエエエエエエエエ（反響）」

2月16日（土曜日）朝9時半頃、僕はトイレで盛大に吐瀉っていた。

ベチャベチャという、胃の中の物が水に落ちる音と僕の嗚咽が重なって、なんとも形容しがたい音楽を奏でている。って、こんな音、楽しめる奴いたら見てみたいわ。

「オエエエエエエエエエエ」

……だめだ、吐き気が収まらない。

「いつまで吐いてんのよー！」

「こつちが聞きと…… オエエエエエエエエエエ」

叫ぼうとして込み上げてくる吐き気。もう嫌だ…… 胃液しか出てこなくなってきたよ…… 喉痛い……

「オエエエエエエエエエエエエエエエエ……」

と、まあ、10分近くこの調子で吐いているのだった。

\*\*\*

時は遡ること30分程。あれは、そう、春人が帰って5分ほどした時だっただろう。

事件は、起こった。

「なあ、なんか、焦げ臭くね？」

「え？あつ！朝ごはん作ってたんだつた！」

「はあ!?!火い扱ってんのに目え離すとかアホか！早く止めろ！てかお前、料理できたんだ!?!」

ガチャツ。という音を立て換気扇が回りだす。

「失礼かな!?!レシぴ通りやれば誰だつてできるでしょ!?!」

ヒヤアアア！若干焦げたあ！などという叫び声が聞こえた気がする。普通、そのレシぴ通りというのがなかなか難しいはずなのだが。

「焦がしてる奴がそういうこと言っているのか」

「こ、これは不可抗力だよ!?!」

「お前それ意味わかって使ってるのか!?!どこも不可抗力じゃねえ!?!ってなんだそりや!?!」

憂美が持ってきたのは真っ黒に炭化したのか元々黒いものなのかよくわからない、得体の知れぬものだった。

「そのど、こがちよつとなのかお聞かせ願えませんかね!?!」



「はい!? そんなに焦げて無いじゃない! このおにぎり!」

「おまつ、それ見て焦げてないってなに…… おにぎりだったの!」

その黒い海苔だったんだ……? 僕の知ってる海苔ってこう…… もっと艶(あで)やかに光を反射してくれるものだった気がするよ?

「んなことより、何でおにぎり焼いたの!」

「焼きおにぎりって知らないの!」

驚きで危うく皿ごと落としそうになる憂美。食品扱ってたんだから気をつけろよ。いや、マジで。こいつの場合前みたいに落とすとしても食わせてくるんだらうけど。

「それ、焼き方違(ちげ)えよ!」

海苔ごと焼く奴とか見たことねえよ。そもそもレシピ通りってどこいったんだ。

あれ、そういえば前ってなんだ。こいつに会ったの2日前だぞ? いろんな記憶が混じってんな。はあ。

「レシピではこう書いてあったのに?」

「そんなわけ…… あっ」

憂美が見せてきた画面には、確かに海苔ごと焼くと書いてあった。もしかして、僕が間違ってたんの?

「いいや、いやいやいや! おかしいだろ! どこどう見たってそんな作り方ありえないだ

ろ！つーかそもそも、焼きおにぎり作るのにレシピとかいらなくね!？」

なんか最近、と言つてもここ二日だが、朝から叫びすぎて辛いつす。

「まあ、少し焦げちゃつてたり、君とは作り方違つたりでも、きつと美味しいから！別に  
お店じゃ無いんだもん、見た目より味と愛だよ！」

申し訳ないが君からの愛は要らない。とは言つてもいいのかダメなのか。まあ、言わないでおこう。

「それに、他にも作つてあるからちよつと待つて！今だすね！」

焼きおにぎりすらろくに作れねえ奴が他の料理など作れるわけがあるうか。いや、ありえない（反語）。

「……………」

ゴクツ。

これから起こるであろう、いや、目の当たりにするであろうケイオスヘルイラスト  
レーテツトマップ（通称、混沌とした地獄絵図）を思い浮かべ、ただ無言で生唾を飲み  
込んだ。

横文字で言つてみたのはなんとなくだ。意味は無い。

「ほらほら、早く座つて〜」

「お、おう……………」

促されるままに席に着く。ケータイを見ると時刻は9時13分を指している。

天井を仰ぎ目を瞑る。きつと断頭台に立たされる囚人は同じような気分なのだろう。

「ほら、食べな〜」

机に並べ終えたらしい憂美が口にした。

「悪い、俺、死んだわ」

目を開く前に一言、死ぬ前に一度入ってみたいセリフベスト8を呟いた。本当はもつとかつこいいシチュエーションがよかつたですまる。

目を開け最初に映ったのは15分を指しているケータイの画面だ。電源切り忘れてたのか。もつたい無い。

2月16日土曜日。死亡推定時刻は9時15分から30分の間。死因は食中毒。というニュースが明日あたりには流れるのだろうか。ちよつと面白い。いや面白くねえよ！

「私の作った料理、そんなに見た目悪い!？」

「いやだつて、焼きおにぎりすら満足に作れない奴の作るものなんてたかが知れて…… うおつ!？」

思わず奇声が出る。たかが知れていなかった。

一口大に角切りにされた野菜が浮かぶ、赤く艶（つや）やかなミネストローネ。

蛍光灯の光を弾くように瑞々しいサラダ。金色のゴマ油がまた、輝きを増させているように思える。

白い生地をほんのりと茶色く染め、その上にはしつとりと生地を濡らすクリーム色をしたバターが乗ったトースト。

そして何より異彩を放つ、目を奪うのは、すべてを吸い込むかのように深い黒の自称焼きおにぎり！

「つてなんでやねん！焼きおにぎり(?)のせいで台無しじゃねえか！他のは綺麗なのに！」

憂美は綺麗という言葉にエへへと照れた表情を見せた。いや、褒めてるけど褒めてねえから！

それにしても、まさかこんな料理が作れるとは思ってもいなかった。料理は性格にならないんだな。またうちに泊まるようなら、今度からつくらせよう。でも、炭水化物多いな。パンかコメか決めてほしいものだ。

「いただきます…！」

久々にこんなまともな料理を食べる気がする。最近は忙しくて（主にバイトという名のオタ活）まともな料理などしていなかったか

「……………!!」

はつきり言おう。めちやくちやまずかった。とりあえずミネストローネ(?)を口に含んでみたわけだが、油粘土を溶かしてお湯で薄めたような味がした。小さい頃にはあるよね、粘土って食べたくなるじゃん?紙粘土はならなかったけど。

「オエツ!なんだよこの味!どうしたらこんな味になるんだよ!味見しなかったのか!?!」

「え?したよ?」

「マジで?」

一拍おいて、

「春人くんが。それに、美味しいって言ってたよ」

ハアアアアルトオオオオオオオ!!だからお前は帰ったのかあああああ!てか自分でも味見くらいしろよ!

だがまあ、サラダに失敗は無いだろう。てか、ぶっちゃけしようがないよな。うん。あとは大丈夫だよな!トーストも焼きおにぎり(飯)も味で失敗しようがない!

「ハムツ... つつ!?!しよっぱ!!ちよっ!水!水!早くよこせ!んあああ!?!」

結果。死ぬほどうしよっぱかった。

え、なにこれ、飽和食塩水でもかけたんですか?バカなの?タヒぬの?現在進行形で僕が死にそうなんだけど?

「ふはあ……死ぬかと思つた……」

憂美が持つてきた水を2杯—ジョッキ並みの大きさのコップ。なぜそんなものに入れてきたかは助かつたので問わ無いで—を飲み干した。礼は言わない。

「何よ大袈裟ね。ちよつとしよつぱかつたぐらいで人間死なないわよ……」

「死ぬんだよ！人間は塩分摂りすぎると死ぬんだよ！醤油飲んで死ぬか!?てか何やつたの君！」

「何つて、塩水かけたただだよ？」

「何でだよ！」

本当に馬鹿なの？この娘（こ）！

「だって、食塩水に浸すと見た目悪くなら無いんでしょ？」

「は？何言つて……ああ！それリンゴな!？」

「同じじゃないの？」

「同じかも知れんが少なくともサラダにそれする人はまずいないから！」

「なーに、私がいるじゃない」

「3秒間死ぬ！」

「3秒間つて何!？」

「……いつ、飽和食塩水にサラダ浸してたのかよ……まじ信じられねえ。これじゃシン

ジ君もランナウエイしちゃうよ。わかる人にだけわかればいいや。

あ、それと3秒つてのにも意味はないかな。

「ねえねえ、どうしたらこんなもの作れるの？ねえねえどうして？レシピは？レシピつて簡単なんだよね？」

「簡単じゃつまらないじゃない？だから少し手を加えて美味しくしようかなって」

「はいっ、でああ！！普段料理しない奴に限って創作したくなるんだよね！創作つてかもはや迷走作品だよね！迷走しすぎて迷子になつてるよね！走作かな！！これじゃあレスキュー隊の搜索も間に合いませんね！」

何言つてんの？つて目で睨まれた。うん、口じやわから無いよね。文にして変換しなきゃだね、知つてたようん。カンジツテスバラシイ（漢字つて素晴らしい）ネ。

「んで、そういう奴つてほんと、何を思ったか死ぬほど不味いの作つてくれるの。何故？why（ホワイ）？ある意味才能だよね。褒めてないよ？こういうのって漫画の中の話だと思つてたよ！つてか、そうであつて欲しかったですよ！」

口の中ヒリヒリするし塩っぱくて唾液半端ないしで、ちよー喋りにくいよまつたくも  
う。

「そんなに言つちゃう?!流石に泣くよ?!せつかく美味言つていつてもらえればいいなつて思つて作つたのに！でも、このおにぎりは大丈夫だよ！美味しいはずだよ！美味しい

ものしか入れてないもん！」

そう言って強引にさしだしてきたのは真っ黒な焼きおにぎり（謎）。

「塩、どのぐらい入れた」

「3つまみぐらいを均等に振りかけたよ！」

「本当か？まあ、おにぎりなんてそうそう失敗し無い（この時点で焦げたりしてるけど）よな。うん」

そしてそのまま一口齧った。見た目は悪い。だが、こいつもこいつなりに美味しくいたいと思ってやってくれたんだ。そう考えると、さすがに言いすぎた気が…… — 僕はこの時、気づいていなかったんだ。『美味しいものしか入れていない』という言葉の本当の意味を。いや、そんな事、知る由もなかった —

「イグアッ!? クイムツツ? ウベしっ! チョツコルエ!!?」

言い過ぎていなかった。いや、むしろあれでもなまやさしいものだっただろう。

この世のものとは思え無い味がした。良薬口に苦しという言葉があるが、これは劇薬の上に苦いとかの問題じゃない。良薬すら凌駕するものがある。しかしそこには甘さなども含まれており、はつきり言っただけがわから無い。どっかのレポーター風にならば、「頭ん中が味覚のオンパレードや」とかかな。うん。口じゃなくて頭だよこれ。



「お前、僕に一体何の恨みがあるんゾア……ゴブエエエエエ」

突如、飲み込むことを胃が拒否しているかのように吐き気が込み上げてきた。うわ、劇物かよこれ。

「ドイレイツデグルウ（トイレ行ってくる）」

椅子が倒れる事を気にする事もできずトイレへ駆け込む。何とかそこまでは出すのを我慢できたが、入った途端何かがプツンと切れる音がして、便器の中に盛大に吐き出された。

見たくもない内容物からして、きつとチョコや枝豆、イクラ、キムチ、梅干し（これは普通だ）等が入っていたのだと思われる。何故入れたし……。

「あつ。んっ！オエツ」

ここでようやく気付いた。『美味しいものしか入れてない』の意味を。いや、確かにどれもうまいけど、それでもなんか、いれたらまずいってわかるだろ！最後に一つ、梅干しの種がポトリと音を立てた。

そんなこんなで、今に至るのであった。

## 僕は胃液が足りないⅠⅠ

「何？そんなに不味いわけ？絶対美味しいのに、ひどいなあ…… おえっ…… 何これ、油粘土だ……」

どうやら彼女もミネストローネを食べたらしい。人は同じような感想抱くんだね。いや、もしかしたらパンもそんな味なのかもしれないけど。

「で、でも、食べられないわけじゃない…… おえっ」

いやいやいやいや！食べられないでしょ！あんた自身今吐きかけてたでしょ！

「うん、今のは確かに、美味しくはなつたよ！でも、そんな、おにぎりは絶対美味しいはずだよ！」

「うっせえ！お前がそれ全部食つたら全裸で逆立ちしながら町内一周してやんよ（よ）オエツ」

「言つたね！食べてやるんだから！そもそも不味いわけないもオエエエエエエ」

吐くなああああああああ！いや、食われても困つてたのは僕だけど、でもリビングで吐くアアアアアア！もちろん洗面器使ってくれた…… わけないよね。

「うわあ…… もう嫌だあ…… せっかくの休日がなくなっちゃうよ……」

そういうえげやつと吐き気収まったな。よかったよかった。よくねえよ。

と言うことでトイレから出る。瞬間『バサツ』つと音がしたと思つたら今度は憂美の嗚咽が聞こえてきた。どうやら風呂場で吐いてくれたようだ。

「おーい、大丈夫かあ？あれを美味しいだろうとか思つてたアホは味覚もアホなのかなつて思つてた梓が通りまーす」

うがいをしたり顔を洗つたりしたので、とりあえず洗面所に入るついでに皮肉を言つてやる。

が、憂美はというとそんな調子じゃなかった。

「ごめんね、ほんと、ごめんね。食べ物粗末にしちやつてごめんね。迷惑かけてごめん、ねオエエエエグヴエエエエ」

「おま、ええええええええええ!」

目には少し涙が浮かんでいるように見えた。

お前、消えるのか？（死ぬまでに言いたいセリフベスト1）とかネタ言つてやろうかと思つたが、これは相当に重症っぽい。

あとできれば風呂場で直接じゃなくて洗面器にしてくれると助かつたなあ。

「ヴゲエエエエ」

「ちよつ、お前、まじ大丈夫か？僕もそんな感じだったのかな。いやいや」

「ほんと、ごめینگエエエエ」

とりあえずうがいをして顔を洗い、背中をさすってやる。痴漢とかセクハラって言われても否定できないよな。あの飯(?)も十分殺人未遂だったけど。ということであん、不可抗力だ、大丈夫。

「わあつたから、もう喋んな。謝んなくていいから。腹減つたし後でラーメンでも食い行くぞ。奢つたるから」

憂美は小さく「うん」と呟くとまた吐き出した。料理にはここまで力があるんだ、一種のテロが起こせる気がする。てか、損するの僕だけじゃん。

ピーンポーン

そんなことを思いながらも背中をさすっていたらインターホンが鳴り響いた。

「グヴェブオ」

「誰だよ!また春人達か!」

「ええ!?!怒ってます!?!俺っすよ!俺俺!」

なんだ、ただの俺俺詐欺か。

「あー、うん。ごめん、多分開いてるから入って、どうぞ」

「オエエエエエエ」

ドアが開く音、そして手すりに付けられた鈴が鳴る。

「??変な喋り方ですね。お邪魔します……って臭っ!？」

ふっ、一般市民にはわからないネタだったか。気になる人は真夏の夜の、いや、言わないでおこう。

「いやあ、ゴメンね?朝から色々とあつて吐いててね。あ、でも風邪とかじゃないから気にしないで。てか、なんか用事あつた?」

「オエエエエエ」

「そうですか……でもこの匂い、吐瀉物以外の物も含まれているような……」

机に何かを置く音がする。

「ベチャベチャグチャッ」

ゲロ以外の匂いつてなんすか……。

「あーえっと、母が作りすぎちゃったんで肉じゃがとカレーのお裾分けに来ました」

「メシヤー!」

さする手を止め来客に飛びついた。

臭いです……と嫌そうな顔をしていた気がするが僕はそんなこと気にしなかった。

タダ飯ってイイね。最高だ。

「オグエエエエエエエ」

因みに、メシヤとはメシア（救世主）と飯や！（感動）を合わせたギャグである。う

ん、分かりづらいね。

あと、うるせえ。

\*\*\*

「カレーは後でも食べられるんで、冷蔵庫入れときますね〜」

瑛香（エイカ）君はそう言うのと、冷蔵庫にカレー入りのタッパを入れてくれた。そのぐらい自分でやるのに。ありがたやくありがたやく。

にしても本当、毎回思うんだけど作る物偏ってるよなああの人。プロ並みにうまいから嬉しいっちゃ嬉しいけど。

「ねえ、食べられる物もらえたのは嬉しいんだけどその子、誰？」

一通り吐き終わりに、一応着替えて席に着いた憂美が耳打ちしてきた。まあ、初めて会うのだ、こいつが疑問に思うのも最もなわけであって、

「ああ、渋谷瑛香君。その子つつつってるけど一応広高通ってる同学年だからな？」

「えっ、嘘!? あんたも結構童顔だけど、この子同い年なの!? えええ!? 信じらんない! 春人君ぐらいが一番高ーっぽいよお! てか広高!? うちより上じやん!」

そう、染めてない割にわかりやすい茶色の短髪、身長は164センチと少し小柄で、顔は目が少し大きくて、どこかあどけなさがある。その容姿ははつきり言って中一と言われても疑問を抱かないぐらいには幼く見える。が、一応同い年だ。その上頭いい。モテ

るだろうなあ羨ましい。あつ、言うてウチも偏差61ぐらいあるんだけどね？

「それが普通の反応だよねうん。実際僕自身瑛香君は瑛香君で、『君』外せないし。年下っばいよね」

うんうんわかるわかる。とうなづいてみせる。

「なんの話してるんですか？すぐ失礼なことが聞こえた気がするんですが？」

「いや、なんでもないよ。憂美にただ瑛香君のこと紹介してただけ。あ、そうそう、こいつは豊島憂美、同高のただのバカね」

え、紹介バカだけ!?などとほざいてる奴がいるがシカト。他に説明できるとしても？

「豊島憂美さんと言うのですね？すぐ美人さんですが、梓さんとはどういったご関係で？もしかして、彼女さんですか？」

「やめろ気持ち悪い。こんなやつ彼女じゃねえ。ただの寄生虫。虫の方の寄生虫な」

こいつが彼女とか、死んでもありえねえ。でも、やつぱり見てくれは一応良いんだな。

美人：：。えへへ／／などと照れているやつもないがとりあえずシカト。

「なら、僕がもらっても良いですか？」

「いいよ。こんなやつでいいならいくらでももらってつてくれ。あつ、ごちそうさまな。美味かったよ」

昨夜の残りの米と一緒に肉じゃがを食ったがめっちゃうまかった。

「えっ」

「あつ、それはよかったです。母に伝えておきますね。でも、こんなに美人さんなのに、いいんですか?」

「いいよ。頭おかしいし」

「なら遠慮なく」

「おう」

見た目はいいけど瑛香君も瑛香君で変なやつなんだよな。主に女好きってやつ。僕の周りには変なやつしか集まらないのか。もしかして、類友ってやつ?

「やったあ! 憂美さん、いいですか?」

「え、ちよ、ええ!」

「よかつたな、これで将来安泰だ。一夫多妻かも知れんが」

珍しく憂美が慌てている。

つーか、知って間もなく名前呼びとか、すげえな。流石ヤリチン。いや、人の童貞事情なんて知らんけど。

「ごめんなさい、お気持ち嬉しいんですけど、でも私、好きな人がいて……だから、その、ほんとすみません」

「えっ」



「えっ」

「えっ」

「えっ?」

こいつさらつと何言つてんの? 好きな奴いたの? マジか初耳。ならウチ来んなよ。で、なんか一人多くなかった?

「!?おいこらガキい! てめえもいたのか!」

「私はお兄たんにいつも付いてますから!」

いつ入ってきたのかはわからないが、そこには目がクリクリとしていて、身長は僕のへそと鳩尾(みぞおち)の間ぐらいの高さの栗色をしたボブヘアの少女がいた。

「何言つてんの? ガキ? 誰? って、うわあ! なにこの子! ちっちゃ! 可愛(かあい)!」  
あなたそつちの趣味もあつたんですか。

「あーうん。瑛香君の妹の、香織(カオリ)ね。小2。いつもこいつについてきてるうっさいチビ」

「なんか、言い方酷くない? こんな可愛い子に! ねえ、香織ちゃん」  
しやがみこんだ憂美はそう言うとその小さな頭を撫でた。

あ。こいつ、死んだな。そう思ったのもつかの間、

「気安く話しかけんなです。黙れです」

香織の放ったデコピンが見事に命中し、憂美の額でペチツと音を立てる。

「いったあ!!」

ほら、だからガキなんだ。可愛くねえよ。

「ただ、香織を可愛いと言ったのは褒めてやるです。もつと私を讚えなさい」

ほんと、どこでこんな口覚えてきたんだか。最近の小2は怖えつたらありやしねえ。

隣では憂美が悶えている。別に、憂美の反応は大袈裟ではない。なぜか小2のくせにデコピンはマジで痛い。骨にクリーンヒットするのよ。ウィークポイント確実に狙ってくるのなんのって。

「あー、香織が来てくれたところ悪いけど、用事もありますし、俺らはここら辺で帰らせていただきますね? あ、それと憂美さん。メアド書いといたんで気が向いたら是非、いつでもメールして下さいね!」

さつきから静かと思つたら、そんな事してたのか。

「では、またご飯持つてきますね〜!」

「香織のお兄ちゃんに手出したら断頭台に掲(かか)げてやるんですからね!」

「おう。ハルさん、良くなつたんだな。退院おめでとうございますつて伝えといてくれ。

あと、飯あんがとな。美味かつたよ」

「まあ、ぼちぼちつてところですかね。前よりは良いですねそりゃ。薬効いたんですか

ね？了解しました。伝えときますねっ。それと、ご飯作ったの母さんですよ」

そう言えばそうだった。

瑛香君は僕らに一瞬笑みを見せ出て行った。香織はというと、憂美にアカンベをして行った。案外憂美に懐いているのかもしれない。というか、いつも通り謎に展開が早い奴だこと。飯はありがたかったけど。

因みに、ハルさんというのは遥瑛（はるえ）さんという人のあだ名だ。彼女は彼らの母親であり、詳しい事はわからないが、書類上一応僕の保護者にもなってくれた人でもある。僕はこの人に感謝してもしきれないぐらいの施しを受けた。生まれつき身体が強くないそうで、つい最近まで入院していたらしいが、飯を作ってくれるぐらいには回復したようで安心した。それなのに二人も子供を産んで、あろう事か女手一つで二人をここまで育て上げたというのだから驚いてしまう。

「断頭台に掲げられちゃうの!?!私悪くないのに!?!」

やっと痛みが引いたのか、身体を起こした―別に倒れていたわけでもないが―憂美。

「断頭台は掲げるものじゃねえ。それを言うなら断頭台で斬った首を掲げる、だ。んな事より好きな人いるってマジ?誰?」

「え?ああ、マジマジ。誰でしょうねー」

チツ。ダリイ。別に気になんないしいや。

「うぜえからいいや。あと、洗い物しとけよ。」

「うぎつ…… え!? あ、いや、そういうええ今更だけどあの二人も苗字渋谷なの? どんな関係? 生き別れの兄弟?」

「あー、叔母さんかな? の子だから、えつと、多分いとこぐらいの関係。僕親いらないから代わりに育ててくれたんさね。んで、苗字ももらった。ほら、ウチの表札渋谷じゃくて太田（おおた）つしよ」

「なんか、ごめん。親、いないんだ。そういうのだと思つてなかった……。あと、表札見ないから知らないや」

こいつ案外そう言うところはちゃんとしてるのな。気にしないと思つてたわ。それと、生き別れとかいうところには僕も触れないでおこう。ツッコむのさえめんどい。

「あー、気にしないでいいよ。別に僕そういうの気にしてないし、てか、親なんていらなかったし。もともといても死んでるような……。いや、なんでもない」

「そつか、そうなんだ」  
「うん」

憂美はそれ以上踏み込んでほなかつた。二人は顔を合わせない。横目にちらりと見えた憂美は、少し悲しそうに俯いていた。

ちよつと、しみみりした空気になってしまった。僕こういう空気嫌いなんだけど

なあ…… そう考えると笑哉と春人って大切な友達だわ。

「じゃあ、ちよつと洗い物してくるね」

この空気に耐えかねた憂美が席を立つ。僕もどうすればいいのかわからない空気だったからありがたかった。

「お前が作った飯、全部食つとけよ」

「そんなバカなっ！」

「ほんと、バカな話だ」

その日は一日中、憂美の嗚咽が鳴り響き、隣の家から苦情が絶えなかった。などということはもちろんなく、勿体無いが流石に捨てることとした。まあ、捨てたといつても食べなかつたというだけで、一応庭にある植物の肥料（専門用語で言うアスカマンと言う）にしたということだ。

後に聞いた話だが、他の人に同じ質問（どういう関係か、というやつ）を聞かれたら「同居させていただいています／＼／＼」と答えていたらしい。吐き気しかしねえ。